

生活支援隊家事エンジャー実践報告

受講生獲得の工夫や修了者へのフォローアップに力を入れています。また、イメージキャラクターを設けることで、訪問型サービスAの認知度が上がっています。

泉大津市社会福祉協議会地域包括支援センター
生活支援コーディネーター（泉大津市訪問型サービスA従事者担当）

生活支援隊家事エンジャー実践報告

家事エンジャーとは…

全12時間の養成研修を修了すると
高齢者等が自力で行うことが難しい
家事を仕事として行うことができます
職能として家事を行うことで
自分が要介護状態になることを
遅らせる効果が期待されます
(市内最高齢77歳)



開催の工夫

- ・開催日時調整 (より多くの人に参加できるように日数や曜日、時間を調整)
- ・申込方法の見直し(FAX、メールを追加し24時間受付を可能に)
- ・求職者への啓発目的でハローワーク会議室で講座を開催
- ・サービス提供責任者や講師と連携し、講義内容を見直し(具体的な家事エンジャーの仕事内容を伝える場を設ける等)



広報の工夫

- ・チラシやポスターの仕様を変更し、ポスター掲示場所を検討(より多くの人が集まる場所にポスターを掲示(スポーツジム、喫茶店、商業施設等))
- ・地域の集まりで説明会を開催
- ・教育委員会や自治会に啓発や協力を依頼(学校・幼稚園等にチラシを配布、回覧板の活用等)
- ・チラシ配布先の調整(受講生に講座開催をどこで知ったか確認し、配布先を都度調整)



開催当初



変更後

開催後の工夫

①大学との連携

桃山学院大学、大阪保健医療大学大学院と共に地域在住の高齢者が就業できる要因の調査研究を実施



②交流会の開催



研修会修了者を対象に、交流会(同窓会)を開催。講師によるミニ講座やとろみ食の試食会を実施

③就職情報フォーラムの開催

研修会終了後、就労に繋がっている人が少ないことが発覚！
市や協議体と連携し、就職情報フォーラムを開催。雇用事業所だけでなく社協ボランティアセンターやシルバー人材センターにも参加を要請し、就労以外の活動の場の提供を行った



生活支援コーディネーターの関わり

【一例】

- ・CSWと連携し、ひきこもりの方が受講。就労支援の第一歩となった
- ・NPO法人、自治会、民生委員、包括、社協等と相互に協力を図っている
- ・定期的にサービス提供責任者と連携し就業率の確認を行っている
- ・講座を契機に、生活支援コーディネーターが周知され、受講生から困りごとの相談を受けることができた

*家事エンジャーの声

年長的に外に出て仕事はできないと思っていたが、少しだけでも役に立つことができている。何事にも意欲的になったような気がする(70代女性)

*利用者の声

介護保険を使うことに抵抗があったが、困っていたので使えるサービスがあって助かった

